

職掌と文学作品

- 大伴家持の場合 -

日大生産工 清水 明美

1、はじめに

大伴家持の歌には、職業上の立場から得たテーマを、歌で詠んだとされるものが多い。例えば、巻20に「防人歌」が集められ、それにまじって、家持の「防人同情歌」が挿入されるのは、「兵部少補」として、難波で防人の検校にあたったためとされている。

このような例では、題詞や左注で、すでにある程度の情報が示され、その時の家持の立場と、作品とを結びつけやすいのだが、職業と歌のテーマに関係性があると認められるにせよ、それを確認するだけでは、歌を理解したことにはならない。

作品は「歌」であるから、内部には虚構も多く含まれる。事実とテーマと作品内部の段差こそが、文学的問題であるとも言えよう。

歌と「歴史」との間にある段差に留意しつつ歌を読むことによって、歌表現の背景を考えたい。

2、研究史

たとえば、「天平感宝元年閏五月六日より以来、小旱を起こし、百姓の田畝稍くにしぼむ色有り。今、六月朔日に至りて忽ちに雨雲の気を見る。よりにて作る雲の歌」（巻18・4122～4123番歌）は、国司家持が、天皇の「みこともち」として、干ばつの際に雨乞いをするような立場にあったことと関係する歌とされている。このような例では、題詞に示された情報に、作歌背景は示されているものの、他に類例を見ないテーマが、なぜ家持によってのみ、歌のテーマとして成立する

のか、国司の役割の内実にせまることによって、はじめて歌の理解と結びつけることが可能になった。

また、「二上山の賦」（巻17・三九八五番歌～三九八七番歌）は、ごく当たり前の国土讃美の歌に見える。題詞・左注には、作歌背景はほとんど示されていない。あえて言えば、左注に「興によりて作る」とあるのが、唯一の作歌背景と言えよう。従って、これまでは、家持にとっての「興」とは何か、という点が議論されて来た。

武田比呂男は、「二上山」の原義を「天上世界、あるいは中継点としてのカムロギ、カムロミという男女二神のいるところ」とし、そこからこの歌を詠むことに、「国土予祝」の意義を見いだす。

これを受けて、吉村誠が、この歌に、国司家持と在地の豪族層との関係を読み解く方法を示した。

「二上山の賦」に選び取られた景、「二上山」と「渋谷の崎」との取り合わせは、山水の表現としては、不自然である。そもそも山と海とを取り合わせられること自体ない。二上山の麓には、射水川が流れているにもかかわらず、なぜ「渋谷の崎」が取り合わされるのか、これまでは、「虚構」「文学的表現」として、誰も問題にして来なかった。

しかし、吉村によれば、これを在地豪族の本願地・祖先神などを背景に考えると、当時の豪族と家持の関係と符合し、このような景の選び取り方をした理由が見いだせるという。特に、「興」と

Consideration the relationship between occupation and literature.

-Ootomo no yakemochi in Manyoshu-

Akemi Shimizu

左注に示したのは、「国司による地方豪族の顕彰」を意味する本作品が、在地豪族に不必要な期待感を抱かせないために、歌としての虚構を含むものであることを明記するためだという。

これまで、見過ごしにされがちだった、古代の地方史と、貴族文学の接点を見いだす方法論が示されたことの意義は大きい。

3、天平期の仏教政策と家持

聖武朝は、大まかに言えば、仏教を国家宗教にまで押し上げた時代である。

その最も象徴的な出来事が「東大寺大仏建立」であろう。家持は、越中にありながら、「陸奥国に金を出す詔書を賀く歌一首」（巻18・4094～4097番歌）を作る。家持にとって、当時の仏教政策が、無関心ごとではないのは官人のひとりとして、当然であろう。その上で、このような政治的出来事が、家持にとって、歌のテーマになりうることであったことは見過ごしに出来ない。

聖武朝における仏教政策のもう一つの柱が、「国分寺」の建立と、それを起点とする、仏教の地方への敷衍であった。万葉集には、家持が国分寺の僧と「布勢の水海に遊覧」し、同席する宴席の歌が残されている（巻19・4199～4206番歌）。他に「東大寺の占墾地使の僧平栄」を迎え、酒を贈る歌（巻18・4085番歌）もあり、家持と国分寺を中心とする、僧たちとの交流は、職務上、どうしても必要であったと思われる。

この点に関して、具体的な事柄を、実体として解き明かしたのか、米沢康である。米沢は、地方における仏教政策の実体を、詳細に調査している。歴史学としての考察である。万葉集も資料として使われ、文学研究における曖昧さを指摘しているにもかかわらず、それに対して、文学の側からの言及は、いまだされていない。本発表では、越中国司家持と、地方の仏教との関わりについて考察する。

4、まとめ

そもそも「歌」は、定型を持つものであるから、伝統的な表現を背負っているものと言える。新しいテーマや歌材は、詞章に表しにくいものである。それが政策や生活の具体性を帯びていれば、さらに歌には取り上げにくい。いわば「表現の制約」があると言える。

そうであっても、家持は、歌のテーマとして取り上げて来た。逆に、定型の中で歌を詠もうとしつつ、テーマゆえに定型からはみ出していく表現もある。

「事実」や「歴史」と「歌表現」「虚構」の関係と、その差異を明確にすることを目的とし、家持の仏教関係歌を読み、その位相を整理する。

参考文献

- (1) 武田比呂男「大伴家持の『祈雨歌』小考」『文芸研究』（明治大学） 第65号 1991年11月
- (2) 小野寛「家持の依興歌」『大伴家持研究』1980年 笠間書院
橋本達雄「興の展開 - 依興歌二首の背景 - 」『大伴家持作品論攷』 1985年 塙書房 等
- (3) 武田比呂男「二上山と家持 - 『二上山賦』の基底にあるもの」『日本文学』（明治大学）18号 1990年8月
- (4) 吉村誠「大伴家持『二上山賦』の基盤」『國學院雑』 第105巻1号
2004年1月
- (5) 米沢康『北陸古代の政治と社会』法政大学出版 1989年